

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：奨励研究

研究期間：2021～2021

課題番号：21H03983

研究課題名 Self-Studyによる，実習生指導を行う附属学校教員の専門性開発の研究

研究代表者

粟谷 好子 (Awatani, Yoshiko)

広島大学・附属高等学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 370,000円

研究成果の概要： 研究の目的は、毎年教育実習生を指導する国立大学附属学校教員の専門性開発を解明することである。セルフスタディというメソッドを用い、報告者の同僚をクリティカルフレンドとして、実習中に各自の実習指導を日々記録しマイクロソフト社のチームスで共有し、意見を求め合った。さらに自己を客観視するため、複数の附属学校の社会科教員を対象に半構造化インタビューを行った。教員自身のこと、教育実習の実際、どのような方針で実習生を指導したか、指導者の社会科観・授業観等の聞き取りを行った。インタビューの逐語録分析により共通点が発見され、附属学校教員の専門性開発の一端を解明できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

各教員へのインタビューの逐語録をコーディングすると、各教員は独自の「授業理論」を有しておりそれを自覚して指導していること、教育実習生の実習全体を「形成的評価」し、実習生の良さを引き出すようにしていることなどの共通点が見られた。また、いずれの教員も、教育実習生の授業実践や実習に取り組む姿勢から学びを得ていた。附属学校教員には、毎年教育実習生を鑑として自己省察の機会が与えられ、授業をよりよくしようとする資質も含まれた。以上のような、附属学校教員の専門性開発の一端を解明した。これらの点を、教育実習指導が初めての教員へ研修できれば、実習指導が円滑に進められることができよう。

研究分野：社会科教育学

キーワード：教師教育 教育実習 社会科教育 附属学校教員 セルフスタディ

## 1. 研究の目的

国立大学附属学校教員は、毎年教育実習生を指導する使命を有する。本研究では、その附属学校教員の専門性開発を解明することを目的とした。セルフスタディという方法論を用い、報告者の同僚をクリティカルフレンド(批判的同僚)として、実習中に各自の実習指導を日々省察してジャーナルを記入し、マイクロソフト社のチームスで共有し、意見を求めあった。

さらに報告者は自己を客観視するため、西日本の複数の国立行政法科大学の附属学校の社会科教員を対象に半構造化インタビューを行った。2021年の4月末から11月にかけて、1人あたり1時間程度、新型コロナウイルス感染症を考慮して、オンラインで実施した。インタビュー項目は以下の通りである。 教員自身のこと、 教育実習の規模(担当人数、実践させる授業数など)、 どのような方針で実習生を指導したか、 指導者の教科観、 教師教育者としての自覚の有無、 公立学校教員との違い等であった。

## 2. 研究成果

### (1) セルフスタディ

キャリア・教科ともに異なる同僚をクリティカルフレンドとして教育実習期間中に記録をつけ、意見交流したところ、自らを客観視することができ、教育実習生への指導の妥当性等を省察・自己調整し、指導改善への可能性が見いだせたことである。

報告者が目指す教育実習指導は、実習生が実践したい授業を実践できるように支援することである。教育実習生の多くは未熟であり、学習指導案の内容、授業実践について沢山のことがらを指導すると「ダメだし」されたとき自己効力感を失うであろう。指導教員と教育実習生とで教育実習のルーブリックを作成し、その目標を達成できるように段階を踏んで指導し、形成的評価を行った。形成的評価を行った点は、以下に示した他附属教員とも共通していた点である。

### (2) インタビューの成果

各学校によって、教育実習のシステムは、事前指導、担当人数、時期等の相違があった。しかし、附属学校各教員へのインタビューデータの逐語録をコーディングした結果から明らかとなったことには、以下の共通点が見られた。

各附属学校教員は、独自の「授業理論」を有しており、それを自覚し、その「授業理論」に沿って実習生を指導していることである。例えば、学習指導要領や教科書に沿った授業を「よい授業」としているわけではなく、ア) 深く、または幅広く教材研究を行って独自の教材を準備したり、イ) 生徒の反応がすぐに表れる資料・発問を準備して「教師として一番おいしい部分が経験でき」る授業をよい授業とした。そのような授業ができるように、授業の前に教育実習生を指導していた。

各附属学校教員は、指導している教育実習生の実習全体を形成的評価し、実習生の良さを引き出すようにしていた。各附属学校では、教育実習の終盤で「研究授業」等の名称の、総括的評価を行える授業を設けている。しかし、この「研究授業」のみで評価している教員は一人もおらず、教育実習の期間をかけて、評価を行っていた。

いずれの附属学校教員も、教育実習生の授業実践や実習に取り組む姿勢から学びを得ていた。実習生が熱心に教材研究し探してきた教材で、よい授業につながるものは、翌年度以降の自己の授業に活用しようという姿勢を持っていた。

附属学校教員には、毎年教育実習生を鑑として自己省察の機会が与えられている。自己の

授業をよりよくしようとする資質も見られた。

以上のような、附属学校教員の専門性開発の一端を解明した。これらの点を、教育実習指導が初めての教員へ研修できれば、実習指導がスムーズに実施できることであろう。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------